

小田原史談

第185号

発行所 小田原史談会
小田原市栄町2-13-20
アオキ画廊内TEL(24)0637

小田原の郷土史再発見

日本最古の水道「早川上水」

石井啓文 ひろふみ

昨年末、市制施行六十周年を迎え小田原市は、NHK大河ドラマに「北条早雲」を取り上げるよう運動するという。早雲に限らず、北条五代の治世とその事績には見るべきものが多々あるが余り知られていない。その内の一つに、日本で始めて敷設された「早川上水」が上げられよう。

天文十四年(一五五)二月、連歌師谷宗牧が東海道を遊歴し、小田原に立寄った時の紀行文『東国紀行』に、次の記述がある。

「君卓のかざられ庭籠の鳥、数々の面白さ、遺水の笕雨にまがはず。水上は箱根の海水よりなごき、待りて驚くばかりなり」

北条氏康・幻庵に歓迎され、氏康館の庭水が、箱根芦ノ湖を水源とする早川であることを知り驚いたことを記している。

貞享三年(一六八)の御引渡記録(稲

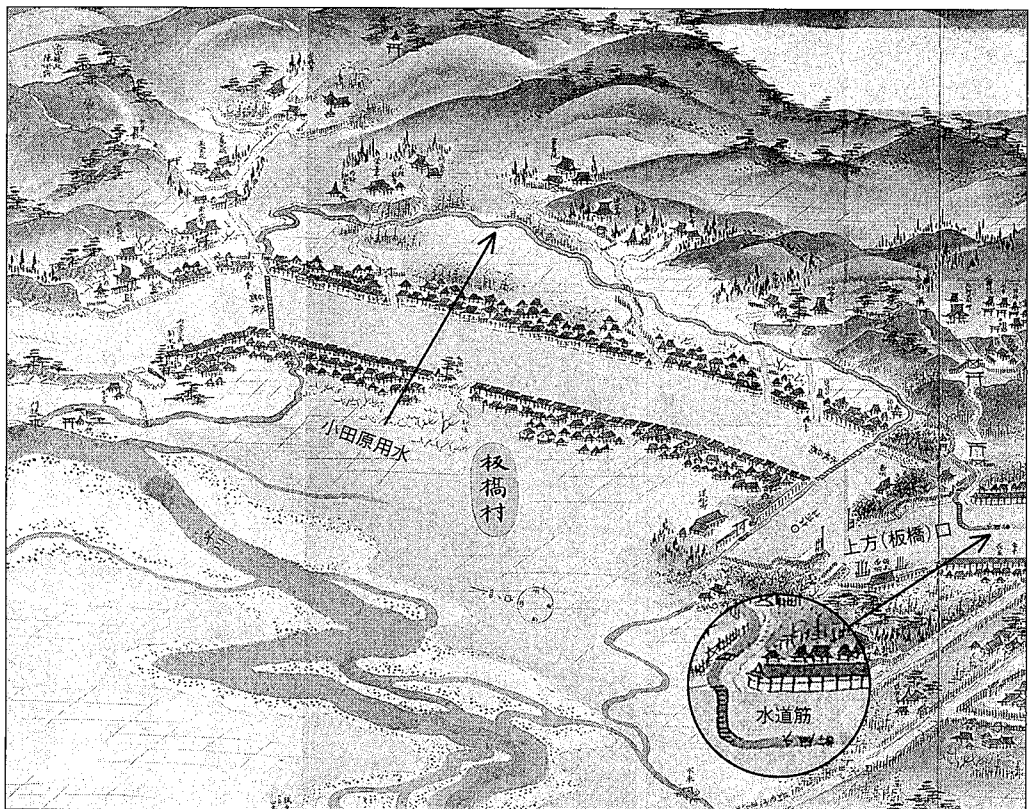
葉氏から大久保氏への引継)に、「小田原用水之事」が記されている。

「小田原町中江之用水早川より取之三丸待屋敷江も水道付申候」

天保七年(一八三六)の史料とされる、『新編相模国風土記稿』(以下「風土記」と略記)小田原宿の項では、次のように記している。

「○早川上水 西方板橋村にて早川を分水し、山角町光圓寺境内より東海道の大路を疏通し、東方新宿町より江戸口外左右の池に流れ入り。此を今蓮池と呼り、按ずるに小田原の役に、細田勘三郎正時、蓮池にて討死せしこと所見あり、此池邊なるべし」

「寛永細田譜」曰、正時、甲州一亂の後、大権現に召出され、井伊兵部少輔直政に屬せらる、小田原陣の時、蓮池に於て討死、法名道寛、今按ずるに此役や、直政山王笹郭を乗破りしことあり、則池邊なり、正時も此時討死せしなるべし、此上



文化4年(1807)『東海道分間延絵図』より

水を府内町々に引分て飲水す(但須知れる。

藤・竹花の二町のみ、水至らざるを以て堀井あり、領主の修理なり」

早川上水は板橋村を経て町中を通り、江戸口にある蓮池に注いでおり、そこに篠(山王)曲輪があったことが

更に、同記板橋村の項では、「小田原用水」を記している。

「○小田原用水 早川の涯に水門一高一丈二尺、幅八尺」を設けて水を堰入、村中を流れ(幅六・七尺)小

田原山角町に入、府内の飲水となす、又村内東海道傍に、小なる溜井を設、非常に備ふ」

時代は前後するが、文化四年(一六三三)作成の東海道分間延絵図には、上方(板橋)口の道の中央に「水道筋」、江戸(山王)口にも同様に「水道尻」と記され、溜井(蓮池)に注いでいる様子が描かれている。貞享三年(一六八六)には「小田原用水」と称されたが、それ以後の文書では「水道」の言葉が頻繁に使われ、天保七年(一八三六)には「早川上水」と呼び、「小田原用水」は開渠であった板橋村の流れであることが知れる。

水道の歴史について、『国史大辞典』で「水道」を引くと、衛生設備の整った明治時代以降の近代水道を説明している。「用水」も「灌漑用水を見よ」とあり、主に田用水のことで、早川上水には連がらない。「上水」は、「飲料水とするために引いた用水」とあり、小田原にも上水が敷設されていたことを記している。こうした上水の歴史について、堀越正雄著「日本の上水」では、上水道を目的、用途上から三つに分類し、近代水道が発足するまでの旧水道(明治時代を含め)五〇箇所を列挙している。

その内、古い順に寛永期までに敷設されたものを次に示す。

①一般の飲用を主とする水道(二九箇所)
神田上水(東京都) 天正十八年(一五九〇)
近江八幡水道(滋賀県) 慶長十二年

(一六七)

赤穂水道(兵庫県) 元和二年(一六二六)

中津水道(大分県) 元和六年(一六三〇)

福山水道(広島県) 元和八年(一六三三)

桑名御用水(三重県) 寛永三年(一六二六)

②灌漑を兼用とした水道(二二箇所)

小田原早川上水(神奈川県) 天文十四年(一五四五)

甲府用水(山梨県) 文禄三年(一五九四)

富山水道(富山県) 慶長十年(一六三五)

福井芝原用水(福井県) 慶長十二年(一六三六)

駿府用水(静岡県) 慶長十四年(一六三九)

米沢御入水(山形県) 慶長十九年(一六四四)

仙台四谷堰用水(宮城県) 元和六年(一六二〇)

佐賀水道(佐賀県) 元和九年(一六三三)

③官公用専用の水道(九箇所)

鳥取水道(鳥取県) 元和三年(一六二七)

金沢辰巳用水(石川県) 寛永九年(一六三三)

このように分類した上で、

「わが国に初めて飲用を主とした公共給水のための水道が布設されたのは、天正十八年(一五九〇)と考えられている。家康は江戸入府と同時に上水の必要を感じ、入府以前にすでに水道をつくることを家臣に命じている。この時の水道は小石川に水源を求めてつくられ、神田上水のもととなったものである」

と述べ、神田上水を日本で始めての飲用を主とした水道としながら、同書第四章では、小田原早川上水を「わが国最古の水道」とも記している。そして、最後に「上水史年表」

を作成し、早川上水を第一に上げ次のように記している。

「天文十四(一五四五) 小田原早川上水(神奈川県)の施工起源については諸説があるが、北条氏康の時代(天文十四年頃)すでに早川から相当の量の

水が小田原城内氏康の館まで届いていたと思われる。城内一円を潤していたかどうかは明かではない。つまりこの当時は、上水といっても、主目的は小田原城を守るために水壕(みずぼり)をひいたもので、その水の一部を城下町で使い余水は灌漑用にも供した。一般の住民に上水供給を目的として作られたものではない。万治二年(一六二一)、時の城主稲葉正則が江戸水道にならって改修を施した。

天正十八(一五九〇) 徳川家康は大久保藤五郎忠行をして、江戸の地に清良な飲料水を供給するため、上水事業の調査を命じた。この調査にもとずき開削したのが小石川の上水で、のちの神田上水(東京都)のもととなったものである。一般住民のために飲料専用の公共給水を目的としてつくられた水道は、この神田上水がわが国で最古のものである。最初は手近な所の水源で極めて小規模な水道だったが、必要にせまられて次第に拡張し、全工事が竣工したのは三代將軍家光の寛永年間(一六三〇～一六四四)のことといわれている。(以下略)」

示した天文十四年(一五四五)の紀行文『東国紀行』と、『風土記』の記述のみで判断しているように思える。

先ず、大きな間違いは同上水の目的が水壕に引水するためとした部分で、北条時代に小田原城に水壕があったことは、判明しない。天文二十年(一五五二)、飛騨から小田原に来た旅僧明叔は、

「從湯下(本) 早雲寺而一里、到府中小田原、町小路数万間地無一塵、東南海也、海水遠小田原麓也、太守壘、喬木森々、高館巨麗、三方有大池焉、池水湛々、淺深不可量也、白鳥其外水鳥翼々然也、太守平日踏美地、」

小田原城の「三方に大池あり」とある。北は池中に弁財天が祀られていた「蓮池」、東は現「二の丸東堀」、南は「御感の藤」を映す「南曲輪南堀」の三箇所と、これらの池沼を連繋した当時の外郭が想定されている。この辺りは低湿地で、戦前までは場所によっては熊笹に覆われた堀跡が残り、底は湧水による若干の流水も見られた(小田原市史別編「城郭」以下「城郭」と略記)という。北条氏時代の小田原城は天然の湧水による溜池を要害としており、堀が掘られたのは、寛永地震後に稲葉氏が近世城郭として整備したときで、早川上水から水を引いたのもこの時である(小田原の城と緑を守る会大木充由氏)という。ただ、近年の発掘調査によれば、それ以前の久久保忠世・忠隣

時代に小田原城の石垣化が進められ、三の丸が形成されたことが判明してきた。因みに、冒頭の宗牧が泊った氏康館「長老館」は、地形上三の丸の範囲に位置していたと推定している(城郭)。

また、『風土記』は板橋村の項で、溜井が「非常に備ふ」とある。これは天正十七年(二五二)に総構之を完成したことからそうした記述になったのであろう。更に、同項では灌漑(田用水として用いられることから、「小田原用水」とし、上方(板橋)口を入つてからは、小田原宿の項で「早川上水」と明確に言葉を使い分けており、町中では純粋に飲料水として用いられていたことが知れる。

『国史大辞典』「上水」の項では、「ひとたび上水道が引かれると、飲料水以外に消防に利用することはもちろんのこと、紺屋・鍛冶屋等の工業用水に、高級武家では庭園用水にも使われ、末流や分流が灌漑用水にも使われた例は多い」とあり、先に示した「日本の上水」の分類は、余り意味がないのではないか。

神田上水について同書は、「天正日記」を引用し、「天正十八年(二五三)七月十二日くもる。藤五郎まゐらる。江戸水道のことうけ給はる」

「徳川家康は、大久保藤五郎忠行を駿府に呼出し、江戸の清浄な飲料水確保を命じた」としているが、この日は、北条氏直が小田原城から高野

山に追放された日で、翌十三日に秀吉が小田原城を検分している。当然家康も同行していたであろう。大久保主水忠行は、徳川実記に三河一向一揆の時(永祿六年(二五三)、銃丸に当り歩行不自由になったため在所に引き籠り、菓子作りに励んだという。これにより、同家は代々菓子司を承つたという。このような人物に江戸の水道を命じたとは考え難い。

伊藤好一著『江戸上水の歴史』は、次のように述べている。「神田上水の開設については、その開設年次と開設者について二説が伝えられている。年次については、徳川家康が関東に入国した天正十八年説と、徳川家光が將軍職にあつた寛永年間説である」

同書を詳述する紙面の余裕はないが、「年次は前者を否定し後者としている。開設者は前者年次が大久保藤五郎忠行、後者が内田六次郎であるが、どちらとも現史料では断定し難い。家康が江戸に入国したとき、藤五郎に用水について意見を述べるよう命じたことは知れるが、家光の代に掘割つたことは明らかである」としている。家康は、江戸入府と同時に上水に関心を示した。小田原合戦後の戦勝検分により、「早川上水」が町作り上、強烈に印象づけられたであろう。秀吉が京都に「御土居」を出現させたのも、小田原城総構に做つたものであることは広く知られている。前記、水道の列挙で、小田

原落城後寛永期までの五〇余年間に、一五の敷設が数えられるのも、各大名が早川上水を競つて参考にしたからとも推察できよう。

小田原市(広報「小田原」00・2・1)は、「小田原用水」と呼ばれた疎水の一部を復元するという。これは、明らかに「早川上水」でなければならず、前述した風土記の明確な言葉使いを冒すもので「日本の上水」に見られぬように、飲用が二義的なものであつたと証明することになつてしまふ。復元した疎水を「小田原用水」と呼ぶことは、郷土史愛好家に限らず、市民が未来永劫悔いを残すことになる。小田原を明示したいのならば、「小田原早川上水」となる

。「市史」「城郭」では一貫して「早川用水」と記しているが、他の文献であろうか。市外の出版物は、先に述べた『日本の上水』を始め、『明治以前日本土木史』『神奈川県営水道六〇年史』ともに「小田原早川上水」と記し、いずれもが開設年代は不明という条件付きだが、後北条時代に敷設されたとして「日本最古の水道」と記している。また、『国史大辞典』・『日本史大辞典』ともに小田原にも上水道が引かれていたとしている。因みに、明治時代の郷土史家でもある片岡水左衛門は、明治十一年に小田原宿水道(明治小田原町誌)としており、幕末から明治時代は「小田原水道」と呼ばれていたことが窺える。そして、立木望隆・

三津木国輝両氏は北条用水(「あるく箱根・小田原」)、中野敬次郎氏は小田原古用水・小田原水道(「近代小田原百年史」)と記している。小田原市は発掘調査に携わつた人の見解を基に、早川上水が純粋に飲料を目的に敷設されていたことを立証し、明確にわが国初めての水道であること、神田・玉川上水以上に、「早川上水」を全国に知らしめるべきであろう。

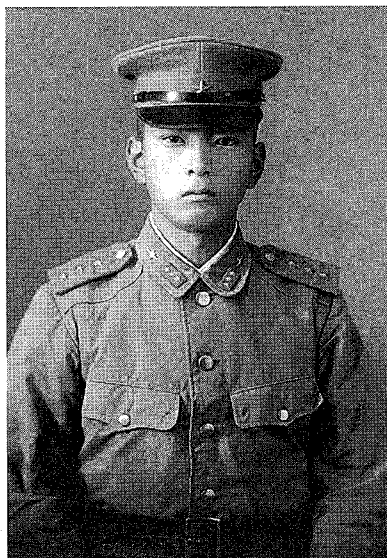
最後に、筆者未詳であるが、文政四年(二六三)七月の「辛巳上京農記」(片岡家文書市立図書館蔵)に次の記述がある。

「小田原駅 御本陣 久保田才助 此駅五年さきに火のさわぎあり。今年三月また失火す五年かほど、四たびに駅中ごとく焼く。前後の火に一字ものこりたるハなしとぞ。されば名高き外郎もかたばかりの飯屋をかまへてうる。北条氏綱がゆるせしといふ八棟造も名のみなりけり。駅のうち路のなかに小川を通して、石にて覆ひたり。酒匂川・山王川かあたりにて見し清流ハ、此末なるへし」

「早川上水」の復元に際しては、当初は開渠であつた小川が東海道の中央を流れ、江戸時代に入つて暗渠になつたであろうことを明確に記して欲しい。そして、後北条氏の優れた事績で日本最初の水道であることを、市民の誇りとして後世に伝え、日本全国に知らしめたく念願している。

母校に証しるされた昭和史の証あかし 少年飛行兵 雲流るる果に

武田たけだ 敏治としはる



17歳の青春を空に賭けて
東京陸軍航空学校時代の池上秀一さん

生家には、名誉ある郷土訪問飛行を前にして、各新聞社が取材に訪れた。その日の家族の様子を次のような記事で紹介している。

弟妹六人晴れの日を持つ
小田原の池上家

航空日に晴れの郷土訪問飛行を行う小田原市新玉二ノ四三三、池上

秀一君の実家を訪れると、お母さんのはなさん

三三が、「あの子が飛んで来ますか」と

ちよつとびっくりした様子で、「ついこの間、

少年飛行兵になったばかりのような気がしますが、もう飛行機に乗

れますか……」と感慨無量の体、

秀一君は高等小学校を優等で卒業後、富士フ

イルム工場へ勤め、十七歳で少年航空兵に合格した。

お父さんの三郎氏(五〇)が満州開発会社に勤務

しているの、留守宅では新名高女生の長女

和子さん(二二)以下春子さん(二三)咲子さん(二三)雄

治君(五)勝君(六)の弟

妹が、お母さんと共に兄さんの晴れの日をご用意して迎えようかと早くも歓迎の話題になった。

初等科二年の雄治君は、「僕も早く飛行機に

乗りたいな」とあどけない空への憧れを示して、航空兵の家は和

やかである。

戦意高揚の折、きつと若き血潮に燃えて御国のため

と志願していったのではなからうか。応待したお母さん

が、軍国の母としての心構えを精一杯、胸のうちを

押さえて語つたのだろう、その思いが黄ばんだ新聞の

紙面にも滲み出ている。

あの子は、航空兵になりたくて私が反対する

とでも思ってたか、自分勝手に志願しました。

私も陰ながら合格を祈っていたのです。

早く、お国のお役に立つよう願っています。

郷土訪問飛行が出来ることだけでも、こんなうれしいことはありません……。

少年飛行兵の道を選んだ愛する我が子へ、期待をこめての言葉であつたかもしれない。

その後、厳しい訓練を経て激戦の続く南太平洋の

ニューギニア戦線へ出撃、昭和十九年六月十二日、武

運つたなく戦死を遂げたことをお聞きする。

地元が熱狂したあの歓迎の日から、わずか二年たらずして戦死の公報を受け

ることになってしまった母の胸中は、如何いかば許りだった

ことか、他人の前ではお国の為に殉じていったと語つ

ても、還らぬ長男に思いを馳せ悲嘆の涙に暮れる日々

を過ごしていたことだろう。そして、涙も乾かぬうちに

に敗戦、池上家にとつての太平洋戦争は感激、悲報、

落胆と三つのドラマを連ねてしまった。

日本の命運を賭けた戦いで南海の果に散つていった

二十歳の青春を不憫に思い、息子の死は徒死にだつ

たらうか、と思ひ悩む日もあつたにちがいない。

「悠久の大義に生きる」と国に捧げた生命、短かい生涯だったが、それがお前の

人生の総てだったんだ、今

少年飛行兵に志願し、東京陸軍航空学校に入学した

新玉小学校の卒業生、池上秀一ひでゆきさんが、陸軍の練習機

に搭乗して郷土訪問飛行にやってくるようになった。

昭和十七年(二五)九月二十日、航空日のことである。

註 航空日、明治四十年(二五)徳川大尉による日本初飛行を記念して、三十

周年に当る昭和十五年(二四)例年天気の良い九月

二十日を航空日と制定、昭和十九年まで継続したが

敗戦により中止、平成四年「空の日」と名称を変える。

池上さんは、大正十三年(二五)一月二十一日生れ当時十八歳だった。

少年飛行兵になることは家門の誉れ、郷土の名誉と

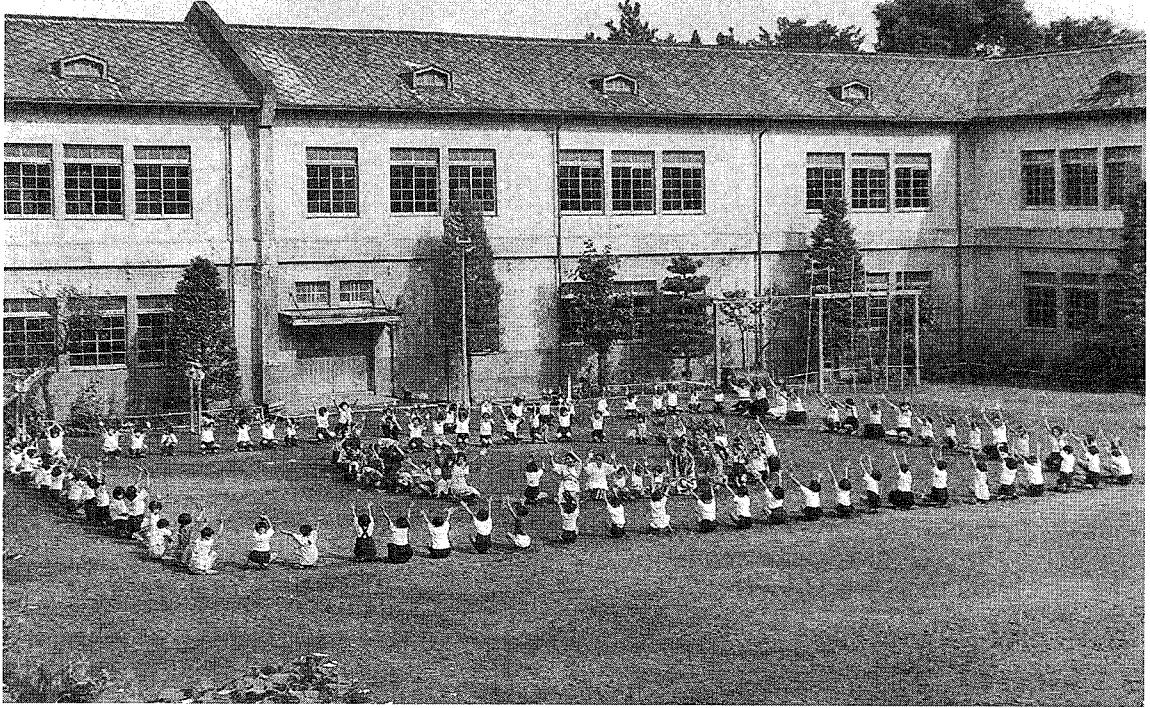
された時代であつた。全校生徒が校庭に「人文

字」をえがき歓迎した。きつと町内の人たちも集

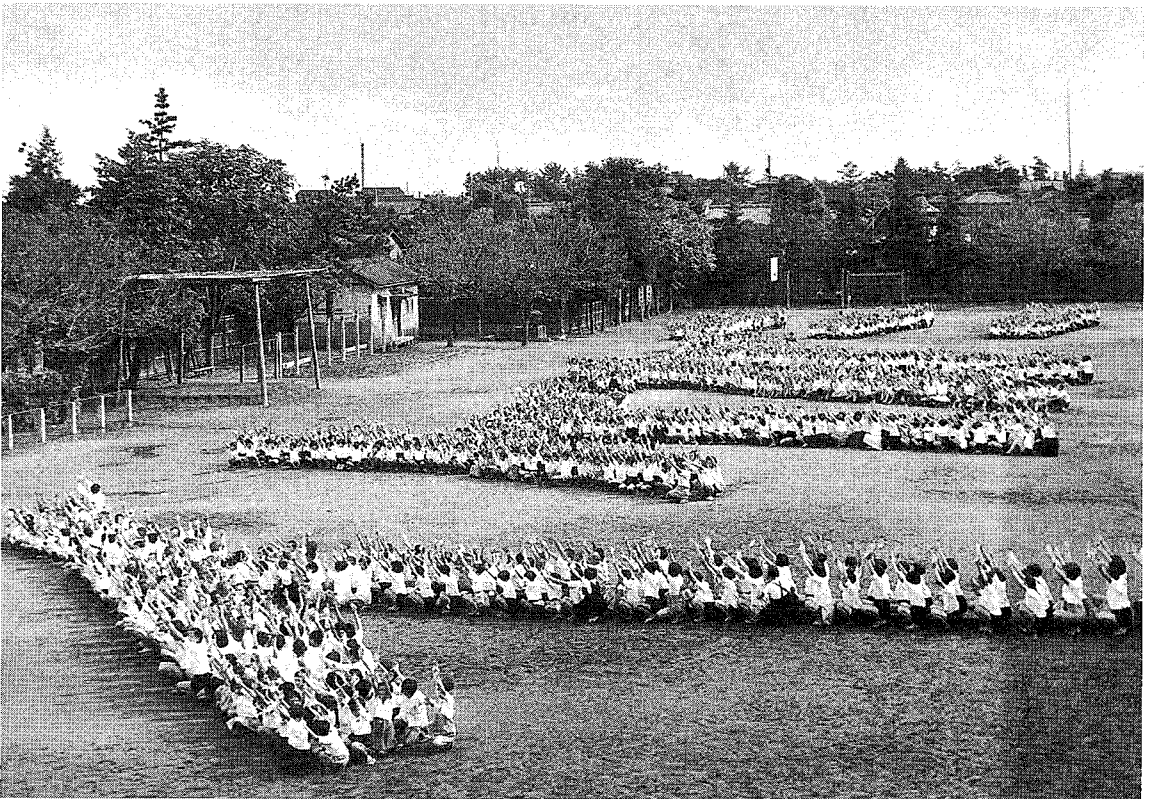
り、人文字のなかに加わつたにちがいない。

池上家では、家族が屋根に上り、日の丸の旗を振つて応えたという。

低空から翼をふる機影の中に兄を求め歓声をあげて迎えたことだろう。



日の丸の旗をつくって歓迎する女子生徒



人文字をつくって歓迎する児童

日の平和は、お前たち若人の犠牲のもとかちとったんだよ、と遺影に語りかけながら悲しみに耐えての長い戦後が続いていたのではなからうか。

その新聞記事は、池上家の貴重な資料として激動の昭和史を伝え、大切に保存されてきた。

しかし、秀一さんの戦時中のアルバムと共に、いつときも忘れることなく胸に温めてきた母、はなさんは、平成四年、八十五歳で他界し、母を看ってきた次男、雄治さんもあとを追うように旅立っていった。

かつて戦火を交えた国々が、友好と親善の絆をより一層深めていったシドニーオリンピックも感激の余韻を残しながら幕を閉じた。

帰国した選手たちの胸にかけた健闘の証は、眩しいばかりに輝いていた。

テレビで観戦していた私たちも、勝利の瞬間に酔いしれ、表彰台で亡き母と共に喜びを分けあう感動の場面に日本中が沸いた。

国旗、国歌論争も、この時ばかりは遙か遠くへ消え

去っていったかのよう感じた。

時の流れは早いもので戦後生まれの人たちが大半を占め太平洋戦争も遠い過去の一頁となってしまった。

かつては選手と同世代の若人が、戦争という巨大な渦の中に巻き込まれ、空に海に散っていった悲惨な出来事も、いつの間にか忘れ去られようとしている。

遊びたい盛りの少年や青年が遊ぶことを忘れ空へ人生を賭けていった。その賭けた空で大半が還らぬ人となってしまう。

私たちは、あの大戦の尊い犠牲の上に、現在の日本があることを心に銘記しなくてはならないが、国に殉じて逝った多くの若人が身をもって護り抜こうとしたものは何であつたらうか。

物の豊かさに埋没し、大切な心を失いつつある日本より、もっと素晴らしい日本ではなかったのか、そんな気がする。

今日の日本が果して彼らの尊い死に対して真剣に応えてきたらうか、私たちは謙虚に反省しなければならぬと思う。

墓地は小田原市浜町の安

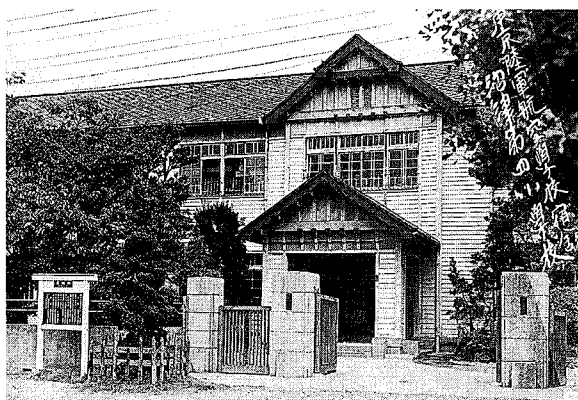
国寺にあり、両親と共に眠る。

「顕光院忠烈日照居士」

掲載させていただいた写真は小八幡にお住いの妹さん、深沢春子さまのご好意によるものである。

東京陸軍航空学校宿舍だった沼津第四小学校

(現住所) 沼津市御幸町四一



屋根に登って秀一さんを迎える家人たち
中央奥に小田原カトリック教会の塔が見える
(聖トマ学園 新玉幼稚園)

東城巡記

③



犬山城

木曾川の南岸にそびえ立つ日本最古の桃風
の天守をもつて別名白雉城とも呼ばれる園宮に
指定されている。

朝に誇り自幸彩雲の周、千重の江陵一目と還す
漢詩の一節を思ふと一瞬であった。

この城は全国で唯一個人所有の城として
有名である。犬山城は天文四年(一五五五年)

に現在地より西南の三ヶ寺山に織田信長によつて
築かれた。この周原合戦で城主であった石川

貞清が西軍に打ちとられ、合戦後この城が
徳川家康のつゆめとせしめられ、城主となつた。

三ヶ寺山より条行の地に築城した。
当初は現在より二階部分のみを築いた。

元和三年(一六七七年)に城主
になつた成瀬正成によつて三階を増築し、現在見る犬山城の姿が
完成された。

この城は木曾川と相俣との平山城であり、最も都の展望台は
木曾川と相俣の山濃尾平野、伊吹山などを見渡し、

小規模な城にはあるが、治政はなほ適当なものと
考へられる。

城の名は低く、自然石を積みあげた最
原始的な野から積みあげた。

城の上りには、針綱神社(昔は現存する城の
位置にあったと云う)と、おの、附近に状況は

二十数年前に訪れたときとあまり変わら
ないが、たゞを懐かしむことである。

い、そのもまたなほ一月、と思ふ。

平成十年五月十五日



やぶ



彦根城

最近補修が行われたと云う報道
を聞き、だが、急な坂道よりこそ、天守
櫓、本鼓門櫓と以前見たときと変わ
てはいなかったが、天守はすっかり塗り変
えられた様で、それにはなほ驚いた。

この城は平山城として井伊直政の子
直継によつて築城された。

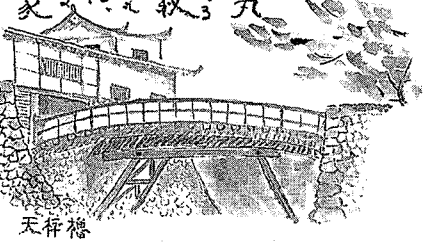
慶長八年(一六〇三年)から元和八年(一六
二三年)の約二十年をかけて築城された。

彦根は交通の要衝で、当時の豊臣氏や西園大名(対しての
防刃ライン)として重要であったため、幕府は多く大名に合力を
命じて幕府の事業として築城を命じている。

彦根城の天守は規模は小さいが、その外観は
切妻破風、千鳥破風、唐破風を巧みに組み合
せた屋敷が美しく、輪郭もなほ厳格なところが
この城の特色である。

また、園宮の天守りには、天守櫓、本鼓櫓、西丸
三重櫓など重要文化財が多く、天守をめぐり
城郭が往時よりよく残っているのは全国でも数
少ない、築城から明治の養老堂まで一度は
領主が変つて行く、井伊氏十四代が天守に上り、
安政の大獄で有名な井伊直弼は十五代藩主である
中、これに用いられ、城郭の中には、旧藩庁や井伊家
下屋敷などがあり、旧藩庁は現在博物館として
伊豆家伝来の数多くの文物を展示している。

平成十年五月十五日



天守

編者註 松益は小栗良英氏の雅号である。

二 尾崎亮司 補遺 小伊勢屋の身代を揺るがせた 小田原競馬場建設 ①

岡部 忠夫

「小田原保勝会略記」碑に関連して
(以上第一八四号)

- ・小伊勢屋の身代を揺るがせた小田原競馬場建設 ① (以上本号)
- ・(次号以下に掲載予定)
- ・小伊勢屋の身代を揺るがせた小田原競馬場建設 ②
- ・お濠理立反対運動
- ・北村透谷碑について
- ・むすび

まちな復興に
競馬開催に乗り出す

尾崎亮司の許に競馬場を開いたらという話を持ち込まれたのは大正十二年(一九三三)頃かと思われる。先年続きの不景気の年である。亮司は早速その話に乗った。話を持ち込んだのは、のちに畜産組合の幹部となる人であったらしい。亮司はまちな復興を真剣に考えていた。競馬開催により来客が増えて町が賑わい、ひいては町財政の一助になるであろうと目論んだのである。しかし、亮司は、馬に触れたことなど全く無く、競馬の事は何も知らなかった。

近代競馬は、慶応元年(一八六五)在留外人により開かれたのが始めとされる。わが国で本格的に始められたのは、政府が、明治三十九年(一九〇六)「競馬に関する閣令」を公布して馬

の改良を目指してからである。明治三十

七、八年の日露戦争で日本の騎兵は、コザツク騎兵に苦杯をなめさせられた。その大きな原因は、日本の馬はコザツクの馬に較べると

小さく、走るのも遅く、能力的に劣っていたと考えられる。

このような雰囲気の中で馬の改良増産を目的に競馬が開かれ、馬券が発売され、各地で盛況を見せるようになった。ところが、馬券の配当金は、無制限のため射幸心をゆるす弊害が多いと、二年後にはその発売が禁止されるようになった。

そのため競馬は衰退した。そこで大正三年(一九一四)政府は、勝馬投票権を入場券に添えて的中者に景品をだすことを認め、さらに大正十二年(一九二三)には競馬法を制定し、最高配当を二百円に制限して一枚二十円で馬券の発売を認めた。そして馬券を発売する競馬会を日本主要都市で開催を認可し、これら競馬会の連絡機関として、公益法人帝国競馬会が設立された。

小田原保勝会の

社団法人化を目論む

亮司は、小田原保勝会を社団法人として競馬を行い、社会事業資金を捻出しようと思案した。小田原保勝会を財団法人とすれば、競馬の開催権が得られると信じた根拠は、公益法人帝国競馬会にあったと思われる。亮司は、小田原保勝会を財団法人にする手続きを関係機関にとつた。ところが、間もなく県は、競馬開催は畜産組合の主権でなければ許可しない旨の通達をだした。それ以後、亮司が保勝会を法人化する動きをしていないところを見ると、難しいとみて断念したと思われる。しかし、亮司は競馬開催を諦めず、ほかの道を探した。

それは、競馬倶楽部を組織し、畜産組合と関連を持たせることを考えたのである。亮司の夢想家の一面をみる思いがする。

競馬場借受契約書に

署名の人たち

亮司が競馬場を選んだ所は、足柄村谷津(現・小田原市城山)の城源寺が小作に出している土地であった。その場所は、初め大正十二年の関東大地震で多くの住宅が失われたのに着目して、住宅地にするために開発の構想が、府川又次郎・星野五郎・相澤富次郎の三人の間で進められ、

花嶽土地会社が設立されていた。会社は勿論未登記であったろう。

府川は荻窪出身で、「羽織袴の人」と呼ばれていた。羽織袴は、当時、貴人や上層階層の人達に限られていたが、庶民にとつて祝儀不祝儀に着用する正装で、威儀をただすものであった。それを府川は常に着けていた。「羽織袴の人」という表現には、冷笑の意味が含まれていた。府川は、人に信用してもらおうにはきちんとした服装が必要であると云う処世感を持ち、農民のくせにとつて評価を腹の中に収め、将来に望みを秘めた感覚を持ち合わせていた。しかし、財産を残したという話は聞いていない。

星野は府川と懇意で、井細田四二八番地(現小田原市扇町二一六)で糸屋を営んでいた。後の話になる。星野は、箱根湯本で温泉開鑿に狂奔した。その場所は、湯本駅から早川さらに支流の須雲川を渡った現在「弥栄館」のある辺らしい。しかし、温泉が出ないうちに、銀行で調達した資金も底をつき開発を断念した。皮肉にも、権利を他人に譲ると温泉が湧き出たという。勿論、抵当にいられた家屋は銀行管理となった。先駆者がときに出会う挫折の憂き目にあった訳だ。晩年は箱根仙石原のさる実業家の別荘の留守番をした。

相澤富次郎は、小田原史談会会長を勤め、また、蕎麦「うどん」田毎」を始めた故相澤栄一さんの父君であ

る。富次郎は、山角町の江戸時代から続いた平戸屋の次男で、明治三十年代に幸一丁目(現・小田原市本町一六一二丁)に移り油商を営んでいたが、斜陽化した商売に見切りをつけ、加工場を御用所(現・本町一―一あたり)の空き地に立て自分の創意で柱の油を綿布に塗布加工した雨合羽製造に腐心した。傍ら箱根奥湯本温泉の開発を手掛け、また、谷津に住宅地を建設する構想を立ち上げていた。

尾崎亮司が、競馬場に城源寺の所有地を選んだのは、相沢富次郎と関係がある。尾崎は相沢と啓蒙学校(三の丸小学校の前身)の同窓であった。相沢は、尾崎が競馬開催を目論んでいるのを知り、土地開発を進めようとしていた城源寺所有地の賃借を肩替わりした訳である。

この場所を選んだのは、小田原駅に近く交通に便があり、箱根に遊びに来た遠来の観光客が競馬に親しむ機会が持てると云う見方であった。契約書の借受人に、馬場英一郎、尾崎亮司と、さきに記した府川又次郎、星野五郎、相沢富次郎の三人と、続いて伴野熊太郎、阿部為治、松尾朝三、岡田博久、川部謹三の五名が記されている。

普通ならば、借受人は尾崎亮司の筈であるが、彼は二番目である。表面に立つの避ける彼の控え目な姿勢が滲み出ている。勿論、最終的責任は亮司が背負った。

馬場は今となつては、東京市日本橋区堀江町に住んだことだけが分かつているだけである。

伴野は小伊勢屋出入りの植木職人で大窪村板橋(現・小田原市板橋)に住んでいた。

阿部も同じく板橋に住み紙漉ぎを営み、いつも小伊勢屋に入入りしていた。烏が鳴かない日はあつてもこの人の来ない日はない」と小伊勢屋の女中達に蔭口されるほどであった。

松尾は小田原駅前(現・栄町一―二)で菓子商を営んでいたが、競馬に凝りに凝つて自分で馬を持ち、果ては息子を騎手にする程に入れ揚げたが、息子には早く死なれた。

岡田は小田原町幸二丁目(現・本町一―十一―九)で豪勢な三階建ての料亭「花菱」を経営していた。伴を関西のある料亭に修行に出していたが、本人は身を持ち崩してしまつた。

川部は子供を亡くして、夫婦で小田原町十字一丁目(現・南町二丁目)にひそやかに暮らしていた。

競馬場の開鑿着工

賃借地の面積は六町二反九畝二十五歩。賃借期間二十五年間を第一期と第二期に分けて、第一期は一カ年につき一反二十円、第二期は反当たり最高七十円から最低四十円の間とし、六月、十二月の二回に分けて前納する条件だった。この条件で第

一期分を計算すると年間二百四十六円強の賃借料となる。

契約が済むと、小田原駅から競馬場への自動車道路の開鑿を着手しようとしていたところ、大正大地震で工事は一時中断された。工事が再開されたのは翌十三年(一九二四)である。

三光舎牛乳舗の用箋に記された工事請負書には、着工の始めが十月九日終わりが十二月十五日で、請負代金は二万二千九百拾貳円五十銭とある。

三光舎は御幸座隣にあり、旧小田原藩時代は牢屋町と称された所にあつた。経営者の田廣勝三は町会議員で、この年足柄下郡畜産組合が創設されると、代議員となつた人だ。

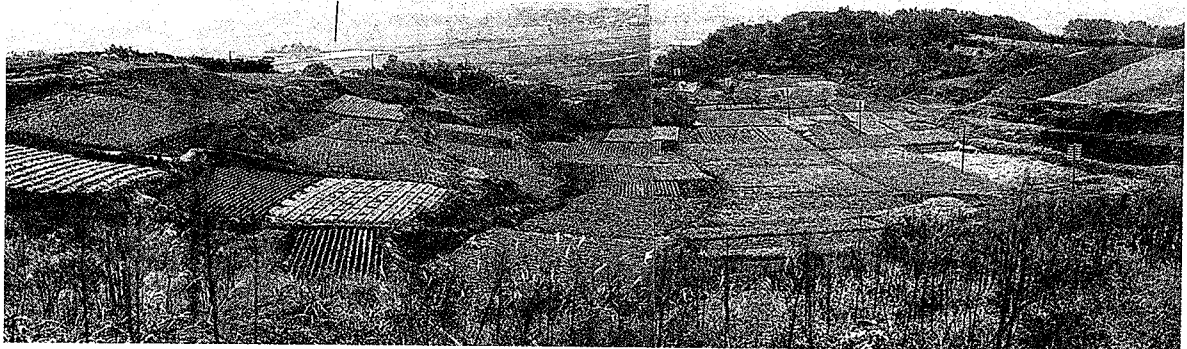
余談ながら、当時はまだ酪農という語はなく、この言葉が登場するのは、一、二年後の昭和初頭(一九二〇)のことかと思われるが、一般に広く用いられるようになったのは、戦後も昭和三十年代以降(二〇五〇)になってからである。それは酪農家の規模が拡大し乳牛の多数集団飼育が行われ、乳業工場の基盤が出来上がった時期である。

それまでは、搾った牛乳をガラス瓶一つ毎に入れ熱処理を加え、朝、ボックス型の荷車で宅配する製造販売を兼ねたものであつた。多古(現・小田原市扇町五)の中村牛乳店では、乳牛を自家で飼育する他に農家から妊娠した農耕用の牛を期間を限つて

借り入れた。

(つづく)

現小田原市庁舎・中央公民館(当時養魚場)



競馬場開鑿直前の風景〔大正13年(1924)頃の撮影 尾崎正氏所蔵〕

レイテ戦の別れ

金子 中二

筆者五列目の右から四番目

一 出征のときの別れ

昭和十九年(二九四)八月、私が陸軍
大学校を卒業し、新たに第百二師団
の参謀として、フィリッピン^のセブ
島に赴任することになった時であ
る。

当時、第二次世界大戦もようやく
終りに近づき、日本の敗色も濃く、
南太平洋における日本軍の戦況は、
日に日に不利となりつゝ、ある時で
あった。既にハルマヘラも米軍の手
に落ち、次の上陸地点はフィリッピ
ンに向けられていた。陸大の卒業図
上戦術でも比島防衛の問題を取り上
げており、当時、日本軍は、比島を
決戦場として逐次兵力を増強中で
あって、赴任後の苦戦も予測され、
十中八・九は死を、当然と覚悟しな
ければならない状況であった。今戦
場に赴くに当り、再び家族に会うこ
とのない永遠の別れとなるかも知れ
ないのだ。それだからこそ、この別
れを特別の別れとはせず、日常の出
勤のときの別れと同じようにしたい
と願ったのであった。当時、出征軍
人を戦場に送るときは、在郷軍人会、
国防婦人会、町内会の人々が職を立
て、日の丸の旗を振って見送って
くることが多かった。死んで帰れと励まされ
ることは嫌だったし、また、勝って
来るぞと勇ましく出かけることも出
来なかった。戦地に行くのは私の任
務であり、そのような特別の感情は
持ちたくなかった。更に当時の戦況
はそんな生易しいものではなく、生
死、勝敗を論ずるより、ただ任務に
対して懸命に努力するより仕方がな
かったのである。

出発の日、昼間は何をしたか余り
覚えていない。午後妻の純子が私の
似顔を描いてくれた。天宅の叔母が
別れの挨拶に来ていた。叔母は神戸
から疎開して直ぐ近くに住んでいた
のだった。純子とは殆んど別れらし
い言葉を交わすこともなく、時間が
来たので子供達と一緒に、すぐ近く
の西千葉駅に出掛けた。駅まで見送
りに来たのは、純子と二人の息子と
天宅の叔母の四人で、他に乗客は二
三人しかいなかったようである。

やがて電車が来る。「じゃ、いつて
来るよ」電車に乗る。窓から外を見
る。動き出す電車の中からホームの
垣根の近くで、二人の子供が振る日
の丸の旗が目に入った。どこから
貰ってきたのか今迄気がつかなかっ
た。出勤のときの別れとは少し違っ
たが、勿論一般の出征の時の別れで

来たので子供達と一緒に、すぐ近く
の西千葉駅に出掛けた。駅まで見送
りに来たのは、純子と二人の息子と
天宅の叔母の四人で、他に乗客は二
三人しかいなかったようである。



平成12年度卯月会 (陸大58期同期会) 東京総会記念 中央三笠宮御夫妻



はない。特別の感情を起こさずには淡々と迄はいかなかったが、日常に近い気持ちで別れ得たことは、心に大きな安らぎを与えてくれたのだ。何時の日か再び「只今」と云って帰ってこられるような気がしたのだ。その後レイテの戦場に於いて、数回弾に当たり、傷つき動けなくなった時もあったが、幸いにして出征の時の別れは、死の別れとならず、一年半後には再び無事帰宅することができたのだ。

二 戦場の別れ

戦場に於ける別れは、一寸先の分らぬ別れであり、異状の雰囲気の中で行われるものだけに、平素の別れとはまた違った感情を引き起こすものであり、常に死の影を背負った別

れであった。或る時は戦場の出会いが、即、別れであり、その別れはまた永遠の別れとなることもあったのであった。

山本義雄君と深田蘆君とは共に東京陸軍幼年学校の同期生として、十歳歳の頃から寝食起居をともにし、四歳歳の頃から寝食起居をともにし、深田君は一年生のとき身体を壊して一年延期し、私も陸士一年のとき延期したので、私と深田君とは陸士四十八期として士官学校を卒業した。私と山本君とは東幼三十二期生として幼年学校を卒業し、山本君は陸士は四十七期として卒業していたのであった。その後山本は藤原と、深田は前田とそれぞれ改姓している。二人とも高知の人である。

この二人と、場所は若干離れてはいたが、同じレイテ島のカリガラの戦場で殆ど時を同じくして出会ったのである。それも砲声の聞こえる戦のさなかに、全く予期しないこの出会いは大きな驚きであった。砲弾下の出会いは、懐かしさを通り越し、ただお互いの健在を祈るのみであった。数分間の任務についての会話の後、それぞれに別れを告げたのであったが、別れた二人とは、その後再び会う機会は無縁に終わったのである。昭和十九年十一月一日の午前九時から十一時頃のことであった。今、レイテ戦の当時の状況を思い出すま、書いてみる。

昭和十九年十月二十日、米軍がレ

イテ島に上陸を開始するや、二十五日、第三十五軍は鈴二号命令(レイテ島に於ける決戦)を下達し、師団(私の所属する第百二師団)はこれによって第一六九西村大隊、第一七二田辺大隊と師団工兵隊の一部(本部後藤、第二中隊宮崎、第三中隊折田、第五中隊大戸、第八中隊浜本)のレイテ島への移動を命じ、師団司令部は二十日六日イロイロからネグロス島バゴロドに行き、師団砲兵隊、師団輜重隊とともに乗船を待ったが、輸送艦の到着が遅くなるので、私は先に移動を命じた大隊の戦闘指導の任を受けた。まず、二十八日夕、飛行機でバゴロドを発つてセブに行く。その夜宿舎で夜間の爆撃を受ける。翌日、オルモック行き飛行機を求めたが制空状況悪く実現出来ず、やむなく更に一日を待って三十日夜、装甲艇でオルモックに向い、三十一日未明、オルモックにつく。湾内には撃沈された輸送船の赤い胴体が、不気味な姿をさらしている。所々破壊された家屋の並ぶオルモックの町を通りファトンにある三十五軍の戦闘司令部所につき戦況の説明を聞く。

この時、軍はなお第十六師団がブラウエン、サンタフェ、サンミゲルの陣地を保持しているとの判断のもとに、タクロバン平地に於ける決戦を企図しており、軍の友近参謀長から「軍は速やかにタクロバン平地に進出し、タクロバン附近に上陸中の敵を一挙に撃滅する企図をもってい

るので、師団は先遣隊を速やかにタクロバン平地に進出させ軍の集中を容易にせよ」との任務を与えられた。全般の戦況は、第十六師団は海岸陣地から若干後退した陣地に拠り苦戦中で、新に二十六日から三十日にかけて到着した部隊は次の様に行動中である。ミンダナオの第四十一連隊(炭谷大佐)はハロ方面に、集成されたセブから来た天兵大隊(藤原少佐)はバルゴ・サンミゲル方面に、ボホールの第六十九大隊(西村中佐)はハロ方面に、バナイの第七十一大隊(田辺大佐)はカリガラに向かいそれぞれ前進中、更に十一月一日には決戦部隊として第一師団がオルモックに上陸することであった。

以上のことを聞き、私は急ぎカリガラに向かい出発することにした。カリガラ方面の戦況を報告するため無線機の数が少ないため断わられ、代りに伝令要因として三名の兵を同行することになった。

三十一日午前十時過ぎ、オルモック北方のファトンの軍の戦闘司令部所を出発、オルモックーカリガラ道を一歩北進する。時々飛来する敵飛行機の爆音の聞こえるたびに、道路脇の木の下に身を隠しながら前進する。途中カナナガ附近で百七十一大隊に合う。田辺大隊長に部隊の状況を聞き、私の事後の行動予定を話し更に先に進む。夕方近くリモン峠に着く。この場所が数日後から、約

一か月半以上にも及ぶ第一師団の死闘の場所になろうとはまだ想像もつかなかった。携帯口糧で食事をして休んでいると、自動車隊のトラックが来たのでそれに便乗させて貰いクラシアンまで来る。ここからは再び徒歩で暗い夜の道を歩く。明け方近くなる頃、前の方から三三五と杖を突いて負傷兵が歩いてくる。十六師団の野戦病院の人達の撤退中とのことである。負傷兵に部隊の様子を聞きながら全般の状況を判断すると、戦況に大きな変化の生じていることを知った。一刻も早くカリガラ平地に出て前方の状況を確めなければならぬと先を急ぐ。

カポーガンの東側を流れるナジソン川の渡河点に着く。師団工兵の大戸大尉が渡河点を管理していた。前方にある諸部隊撤収について必要な指示を与え先を急ぐ。ファトンの軍の司令所からカリガラまで約四十

十一月一日、夜明けカリガラの西側に着く。こゝで図らずも第四十一連隊長の炭谷大佐の一群に出会う。ハ口附近の戦闘の概要及び一六九大隊の状況等を聞く。速やかに部隊を収容して、カポーガン南方の五一七高地附近を占領して軍の進出を援護するよう任務を与える。

カリガラの町に入る。部落の周辺で数名の日本兵が何か作業をしている。天兵大隊だという。指揮官はと聞くと、指差すのでそこに行ってみ

て驚いた。東幼同期生の山本ではないか。「おー山本」「貴様は、金子」二人共それだけ云ったま、暫く、口もきけない。全くの奇遇である。山本(藤原)は幼年学校の生徒監から比島派遣軍の大隊長要員として赴任してきたのだ。到着とともに海没部隊の大隊長を仰せつかり大変なことだったろう。陣地を掘る満足な土工器具もなく、武器も小銃と軽機だけとか。明日の朝には攻撃してくるかも知れぬ優勢な火力をもった敵に対して、これではとても無理である。全般的判断から第四十一連隊に連携してその北西の高地を占領するように指示して別れを告げた。

その後、天兵大隊は、軍の予備となりファトンの軍指令部附近にいたが、敵がオルモツクに逆上陸したとき、急遽これに対応して戦闘に参加したそうである。その後の詳細は聞いていない。このオルモツクの戦闘は、臨時に附近に居た部隊を集めて編成され、船舶工兵隊の光井大佐の指揮下に入ったもので、全滅した部隊も多くその状況は殆んど不明である。米軍の資料によると、この戦闘で日本軍の一部隊が、町南端の谷間の両岸によって、白兵戦、手榴弾戦を交え、この決死の抵抗で米軍の損害も

少なくなかったという。また、本道の南側で少数の日本兵が前進する米軍のまえに立ちふさがって全く英雄的に、だが絶望的に勇敢な死闘を続けたとあり、更にまた、町の建物の

下に掘ったタコツボ陣地によって、あくまで頑強に戦ったものもあったという。なぜかそのなかに、豪気果敢な性格と剣豪で知られた山本君の姿を思い浮かべるのであった。

カリガラの民家の中で当面の敵情、友軍の状況及び配置等に関する報告を書き、伝令に托して軍の司令所に提出した後、単身トウンガ方向に出掛ける。途中馬の死体があり死臭が立ちこめていた。ダコツト附近の椰子林のなかで陣地を占領している部隊がいる。野砲二十二連隊の一部約二〇〇人ほどである。「隊長は」と聞くと「向う」というのでその方に行きかけると、突然「その辺を動き廻ったら駄目だ。大きな声を出すとすぐ砲弾が飛んでくる。観測機がいるぞ」とたしなめられた。静かに近寄って顔を見ると深田ではないか。「おい、深田じゃないか」「何だ金子か」それから当面の戦況、部隊の状況などを話し合い、私も軍の進出援護の為の陣地配備、敵の攻撃の時機の判断などについて説明し、更に後退して配備する場所等について指示した後、彼と別れを告げた。彼も生徒監から大隊長要員として比島に派遣され、到着とともに第十六師団砲兵隊残存部隊の指揮を命ぜられたのであった。部隊には既に砲は無く、軽機と小銃のみであり、歩兵三十三連隊の退却部隊も合せ指揮していた。五一七高地西方地区に集結後

軍の直轄部隊となり、その後の状況

は分らない。

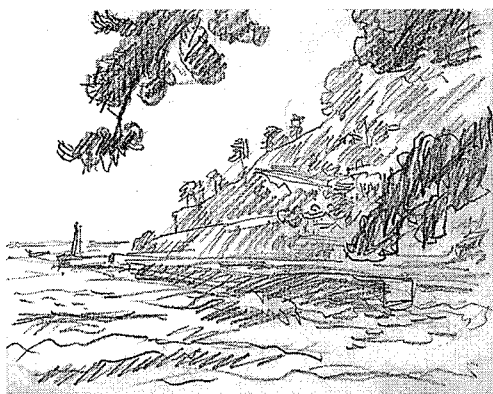
私は百六十九大隊の消息を知るため更にトウンガ方面に行く予定だったが、一人では危険を感じたので、ひとまずカリガラまで還ることにした。ハ口、サンミゲル方向から時々砲弾が飛んで来て、カリガラとカポーガン方向で土煙が上がっていた。カリガラの部落につく。天兵大隊は既に撤収した後であった。部落は無人の地となっており、時々砲弾が頭上を越えてカポーガンの方に飛んで行く。暫くニッパ小屋の中で地図、報告等を整理した後、クラシアンの工兵隊のいる所に行く。

〒310-0903

筆者住所
水戸市堀町一、四四四一

ローズビル水戸五一二号

(つづく)



田辺港引揚回想 ②

現地の婦女子を引率して

井上 尚 たかし

市内の会館を宿舎に

移りたい場所は、食事を援護局の炊事場へ三度三度受領に出かけるのに便利であり、多人数で生活するので、便所や洗面所などの設備のあることが必要で、入浴は、市内の浴場ということにしても、入浴の習慣のない人たちには、当面は夏のことゆえ、戸外でのマNDER(水道)が出来る所であればよかった。

日本での生活に馴染ませるようにしたいということもあって、一時の引き移り先を探す方針を立て、田辺市役所に市長さんを訪ね、現地人來日の目的をる説明し、市内での滞在と宿舎探しを懇願した。援護局からも係官が同行してくれて交渉し、市の関係者も種々検討して、適当なところを探してくれた結果、市内神田町の町内会所属の会館(二階)兼消防器具置場は、かなりの広さがあり、収容

力やトイレの数など一応間に合いそうな所だったので、ここなら一時使用をさせてほしいと市を通じて神田町内会の了解を得られるようお願いした。

借用料(水・電気・汲取り等と修繕費など)等、細部は局と市とで取決めてもらうことにして、数日後にそれが具体化し、援護局の宿舎からそこに引き移った。この引越しには、リヤカーを使ったりして全員であった。とにもかくにも、残留者全員の仮りの宿所が出来てほっとした。

性たちは不馴れな土地での不便な生活に耐えようとした。内地では目色、毛色の変わった人は珍しがられるので、外出は単独行動をせず、問題の起こらぬよう、私は現地語を話せるのを幸いに、彼女らの指導に努めた。

私は局との連絡や買物などに一部の者を伴い、商店での物の買い方とか、金銭の計算の仕方等に慣れさせるようにし、また、地域のご婦人が二、三人いる所で來日の経緯を話したりして、地域へ溶け込む機会をつくるようにした。これとは別に、地区の婦人会の集りにも顔を出す機会をつくってもらい、事情説明をして彼女らへの理解が得られるように心がけた。

残留者一同との決別

残留組の生活のリズムが出来るとある程度が見込みが立つ一方、私には家から早く帰郷するようにと再三の連絡があり、彼女らの今後が気がかりであったが、意を決して、六月十八日の夜、残留組一同に決別の意を告げ、日本定着化のため今後の心得をこんこん

と話した。そして――
―再会の機を祈りながら――翌、十九日、田辺駅から、郷里・小田原へ向かった。

〔補追〕

五十四年めの私の終戦

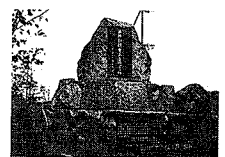
|| 語り部として次代へ ||

幸運だった田辺港上陸

ジャワ島中部の海岸都市スマラン市で終戦を迎え、十月末、タンジョン港着、創設早々の作業隊本部で、以後増大が予想される収容隊員の安全作業、各隊適応の作業配分による体力温存等を基本に、私りのノウハウを投入、各作業を標準化し、英軍港湾司令部より、連日午前十時に指示される、大要、百数十ヶ所、隊員総数七千余名の作業割当業務に従事八ヶ月余、いよいよ引揚げの時期到来、婦女子同行引き揚げの経緯

は、回想記の通りですが、黒潮が岸辺を洗う紀の国、和歌山県は、古くからの捕鯨の町、海の男の母港太地港、北・南米大陸への日本農業開拓の先進的役割を果された先達の出身地、南紀を後背地に持つ田辺港上陸は、複雑な条件を抱えた婦女子組にとっては、全く幸運だったのです。

海に生きた人達にも、開拓に向った先駆者にも、自然との戦いの極限の中で、民族、肌の色、目色、毛色を超えて、人として扶け合い、生きる喜びを味わい確かめ合い、成功への感動を共にした歓喜の成功談があ



海外引揚者上陸記念碑

海外引揚者上陸記念碑文

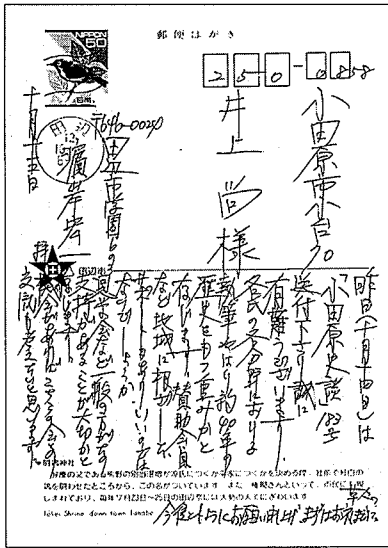
海外引揚者上陸記念碑

太平洋戦争の終結により、海外から帰国・帰郷し、一戦死した兵隊が引き揚げた。ここに田辺港も昭和21年2月20日頃の引揚船が来港して、現引揚船隊が開設され、6月24日まで船隻63隻が入港し、中国、台湾、マレーシア、インドネシア、フィリピン、オーストラリアなどからの引揚者22733名が旅路の第一歩を踏み、同時に親子の別れとなった1万1469組の送別も無言の上陸をした。ここに海外引揚40周年にあたり記念碑を建立する。

つれなき心も、どきどき、東京から来れば、ふるさとには山はありけり、ふるさとには川はありけり(ある引揚者のうたの一部)

昭和41年10月5日
田辺市
田辺市東港引揚40周年記念事業をすすめる会
紀南文化財研究会

る反面、時に利あらず、或は病を得て、共助の努力も空しく全てを失い、異郷の土となられた悲話も同志の挫折談の中に愛を込めて、人の命の尊さが語り継がれた、南紀の「土地柄」の伝統の中で、生まれ育たれた田辺市民の皆様だったからこそ、戦後の焼野原と云われた——現に田辺市の一部でも——故国へ、乳飲み子を抱え、異色の三十三組の婦女子が上陸して来た折、多少の異和感は有ったにしても、一応受入れて貰えたが、他の港だったら、とても斯様な対応は期待出来なかつた事でしよう。



援護局も規定のむずかし
い中、婦女子組の中、連絡待機組十七組へは、食糧面での特段のお力添えをお願いする事が出来たが、宿舎

の問題は、二泊三日の規定から、局外へ帰郷迄の仮泊所探しを、局、市、私と三者一体となり進めたのですが、御地の「土地柄」から同行引き揚げの真意及諸般の事情をご理解賜り、善意に支えられて、神田町の会館借用の細部事項を取り決めて頂き、同行のご一同に辛い思いをかけずに、ひと落ち着きすることになったのでした。

局からの距離七、八〇〇米、待機組一同が、日本の市民生活の第一歩を踏み出す宿への引越は、全員総掛りで早朝から、リヤカーでピストン輸送、共同作業の成果宜しく、夕景早目に終了後、疲れも忘れ今後の問題に付いて、深更に及ぶまで真剣に話し合う事が出来、人柄も分り合える良い

第一夜でした。

帰郷までの幾日かを、この会館で過ごしたのですが、市民の皆さんと快いお話し合いが出来ました事が、今も心に強く残っています。

今こそ、二十世紀の証言

当時、地方との連絡は電話など思いも及ばず、全て手紙でのやり取りが常識、半世紀後の今なら何も問題視されずに、戦後の日本の復興振りを故郷の身内、友人への私信に近況報告、時候のご挨拶など、日本人なら、誰もが考えた常識的行為ですが、終戦一年未滿、未だ全てを話し、まして文書にする事は非常にむずかしく、注意を要する時期でした。

同行の夫人方は、日本定住への情熱が非常に強い上に、出身家庭と家族関係、教育程度と宗教観や健康状況、お子さまの情況(特にN家)からも、三十三組全員の定住を何としても実現し、永いお付き合いが欲しかったのです。

夫人方のご出身が、現地、地区有力者のご家庭が比較的多く、皆さん功労者の娘

さんです。何年か後の故郷のご一族への私信に、日本再建の姿をお子たちと共に書き送る、伝書鳩の大役を背負つての来日ですと、ご主人の家郷への連絡便に全てが書けたとしたら……又別の道が開けたかも、とも思いますが……。

然し、時は昭和二十一年六月(一九四六)海外より戦友、同胞引揚げ半ば、戦犯の追及厳しい中、一言も油断出来なかつた時期、通信文での連絡は困難だったと思います。

この一言(伝書鳩)が、公言出来なかつたばかりに、ご一同五十余年のご辛苦、余人の到底思い及ぶ所ではなかつたと思います。

特に、幼いお子様方の言葉の習熟期から、就学、PTAの問題を始めとして、小・中学校の心身急伸長期に当面され、前述の意味を含めて公言、公表出来なかつたことに加え、育ち盛りのお子様を抱えて、故郷では戦時下とは云え、お母さんには全く未体験の当時の日本では食糧不足時代だった訳です。

帰郷先には、ご主人の生家を取り囲んで、ご親類、

縁者、日本独自の隣組等むずかしい人間関係の中での子育て、成人され結婚問題等で問題発生の折にも、前述の引揚げの真実の全てを公開、ご一家が民族を超え、友好、人間愛から統は執られなかつたが、お国への貢献者として、広くご紹介証言する、機会を作り得なかつた腑甲斐無さを、恥入るばかりです。長のご無言、平にご容赦下さい。

長かつた半世紀余!日本定住の情熱を相伝、ご苦労の中にも、新しい世紀を迎えられるご一家の皆様こそ、お国の為の貢献者です。堂々と胸を張って、ご一族の皆々様、益々のご繁栄、ご健闘を心からお祈り致します。

機を失した感があります。が、五十五回目の終戦記念日を迎えるに当り、今こそ引き揚げの全容を公表、公開に踏切る時と決断。後述の好機と、その道の達人ご両所の並々なぬお力添えで、戦いを蔭で支えられた、斯様な、民族を超えて愛を貫徹された美談が在った事実を、二十世紀の証言として後世に伝承することこそ、引率者(私)の終戦処

理の務めの一つとして、ここに銘記した次第です。共生の友よ、永遠に

一九九九年、余日少ない午後、在東京都内、某TV番組制作会社、仲宗根様から、私宛に発信されたFAXの細部打合せ中、偶然発せられたインドネシア語が、打合せ事項の中の共通語として通じた事が契機となり、南方カリマンタン島で、散華されたご尊父並びに諸英霊の鎮魂と平和、友好、人間愛のメッセージを込めて舞う……などをテーマに、「フラメンコスタジオ」の主宰者で、南方引き揚げ事情に詳しく、且強い関心をお持ちの県内、大和市ご在住の山口のり子様

賞鑑句

青春はもんぺばかりや針供養 シゲ子

作者は小田原史談会の長老木曾正雄氏の夫人である。もう半世紀以上も前になるが、その頃の日本の暮らしを知る女性にとつて、忌まわしい戦時中だったとはいえ、モンペは懐かしい言葉なのである。楽しいはずの青春時代を地味なモンペ姿で銃後をまもってきたのである。唐突なようであるが、針供養の季語が何か時代の移り変わりを象徴しているように、深い感銘を受け作者の心が自ずと伝わってくるのである。

(剣持芳枝)

をご紹介頂けましたのがご縁で、今世紀の証人の一念が通じ、私の終戦処理展開へ急発進出来ることになったのです。

山口さんのお人柄と活躍のご実績から、各階、各層の有、著名人が多数ご参加の後援会連絡網のうち、田辺港上陸ということから、山口様↓東田泰一先生↓東山省三様↓福本匡伸様↓濱岸宏一様(紀南文化財研究会事務局長)の順で、連絡便が伝えられると共に、かねて仲宗根さんの電話を機に山口様のお手元へお送りしておいた、引き揚げ回想記のコピーを山口様のご厚志で濱岸様のご机下へご回送して頂いた結果、同氏のお力添で、田辺市教育委員会よ

り、全く思っても見なかった、「引揚港、田辺―海外引揚げ五十年―」と、主銘記、伴書付堅表紙製本、丹念に編集され今大戦の略、外史を語る上で、蔵書本として大切に保存したい。

平成八年十月一日発行の『海外引揚げ五十年史』を、早速ご恵送賜り、拙文の紙背をご読破、素志お汲取りのご厚志に唯々感謝、感激、と共にこの五十四年余のご無沙汰、附甲斐無さを思い、恥入るばかりでした。

頁を繰る中で、船友の諸橋氏(長岡市)の記事に、同行者、N夫人の船中出産に当り、天幕張りの産室で船長さんの大健闘、若い看護婦分隊の心配りで、船全体の気分が和らぎ、家郷近しを思い出させた様でした。と記され、又、星井氏(伊丹市)の感想文「田辺港上陸の印象」記、十項目中、第二項にも、

在留邦人の現地妻が三十三人同船し、ともに上陸したとき、六月上旬の寒さに震えているので、寒いだろう…とアッパッパ姿の現地妻に話しかけたところ「ト

アン(旦那)の国へ一緒に来たので寒くない」と健気に答えていたが、この妻たちのこれからの日本の風習と生活に苦勞するだろうと案じた事(記念誌)とある。

タンジヨンの港で、一つの釜の飯を食事し、連日七千余名で、百数ヶ所に分散、安全、体力温存第一に作業七、八ヶ月余、これで、一応俘虜生活終了!五月末出港、田辺港へ。

この同船引き揚げには、内心案ずるものがあつたのですが、船友三千百五十余名の各位、口にこそ出されなかつたが、心の片隅では戦後の混乱期の中、夫の愛を信じ気候、風土、宗教、生活様式も異なる中での永住、子育てをご案じ下さったお心根に、胸迫る思いをいたしましたのは、私一人では無かつたと思います。

この心根を思い、全ての制約、気兼ねなどせずに、全てを語り書き遺し、二十世紀の証言として正しく伝承、後継家族ご一統が胸を張つて家系を誇れる生活の永続、発展への道を拓くことに寄与することが、私の終戦処理をより前進させる

ことに継がる訳です。

この意を込めて、「田辺港引揚げの回想」補遺の稿を起し、ご一統家系の再認識を今世紀の語り部として、ご案じ下さった船友各位への御礼、ご報告と共に、定住へのご理解、共助の輪の拡がり、ご近隣から津々浦々の心ある方々への「メッセージ」になり、契機となつて、共鳴共助の輪へのご賛同、ご参加が願えればとの心願を込めて、素志を申し上げました次第です。

今般、この終戦処理が急展開出来ましたのも、濱岸先生のご見識と、証言へのお介添え、山口さんの抜群の行動力と、広汎な後援会連絡網の諸先生方のご協力など、皆様の特段のお力添えで、半生の懸案が急展開、私なりの終戦処理へ向かつて、二歩も三歩も前進で、ご一同様共々厚く御礼申し上げます。

引き揚げ船、VO五十五号の船友各位、同行ご一統の益々のご健祥をお祈り申し上げます、これをご縁に、今後共宜しく、ご教導、ご交誼の機を得、再会をし、ペンを擱きます。(おわり)

酒匂上輩寺三十四世桜沢堂山の研究(六)

谷口得二

なお、繪師は一壽齋国貞である。

その四十九 五十 見開き図「飯

嘉永の頃には柳下亭種員はもう人も知る戯作の大家であつて、門下には、柳煙亭種久を初めとして、翠松園種春、柳昇亭種蔭、柳雨亭種安などを配下にもつ戯作文壇の雄であつた。これについては、『仮名反古一休草紙』二編上(嘉永五壬子年新正発販)の奥目録に次のような広告を掲載している。

- 倭国染五色彩線・初編二編 柳煙亭種久 一雄齋国輝画
- 滑稽一笑談 浮世文庫・全一冊 柳昇亭種蔭・柳雨亭種安合作
- 星月夜窓下白梅・初編二編 翠松園種春 一雄齋国輝画

右はいづれも門下生の作で種員校合の草紙来丑年初春うりいだし候間御もとめ御一覽程希上候。

この様な先輩門人のいる種員配下の文域に堂山が入り込んだのである。そしてペンネームに柳水亭種清と称することを許される。

種清の処女作品群とされているものを挙げてみると嘉永七年刊の版本が三点も上梓されているのである。すべて、合巻本で、『都鳥汀松若』、『踊形容花競』、『箱根靈驗躰仇討』であるが、その中でもどれが真の初筆であるか、これを追求するために

は、書誌的事項を詳記することとする。

○「都鳥汀松若」―初二編各上巻の序年記は、(嘉永七甲寅歳三月)の種清自序と、(嘉永甲寅孟夏)の種員序文とが記されている。改印も寅五と寅六である。当然出梓は改印後となるので、松若の方が何れにしても先に出版されたものとみて間違いないものと思われる。松若・第二編の序文には、左記のように記述されている。

今茲己菴に入門の稗官柳水亭種清が能晋齋の能も仕組める廓白浪の下流を汲て硯の石浜に湛いれ筆の綾瀬にものしつるハ世界も吉田の何某と 大きく梅若塚の故事にて初編ハ鐘が測のかねて梓行し今ヤ二編をせき屋の里猫三囲の三篇も牛島の牛の歩行に違ひ墨水のながれ澱す発兌バ川霧に見る東の筑波ありやなしやとなりてもゆかて在五郷が歌に等しくいざごと、はん都鳥の後編ハと書房が廊を繁く尋ねて求め玉ひ然も噂ハ西に聳る富士と共に弥高からんを偏に願ふと言すさへ其辺にハ最近き真土山の麓園に住、柳下亭種員なり

嘉永甲寅孟夏

○「踊形容花競」―袋紙の右側に、一陽齋豊国画があり、中央に白抜きで、「嘉永寅歳評判記・全三冊」がある。初編全十二丁序文に年記はなく、改印「寅壬七」があり、絵表紙に、「甲寅発板」があつた。内容は「都鳥濠評判」の評判記である。表紙見返しより四才まで三代豊国画が口絵を描いていることは注目に値する。本書は三月、河原崎座興行「都鳥廓白浪」応じて出梓されたものと思われる。

○「箱根靈驗躰仇討」―初板本ではないが、後摺改題本によつて記述する。即ち、表題は、「箱根山躰の仇うち」全一冊五十丁で、表紙絵のみ外題芳幾画となつており、一才序文には改印(巳十二)がある。しかし、この序文は左記の通りしるされている。

函嶺靈驗の院本に其声も喬き山の場躰勝五郎が本説を約着りて板元の勸に乗発す戯作の道もまだ初花のかき学彼筆助の筆さへも転らぬ氣転を車の像に引起たまはる看官と師の助他智を 繩綴上たる復讎狙外さぬ本望の弓箭を縁喜に此雙紙も只管盛行を睭ふにぞ。

柳下亭門人 寅孟陽 柳水亭種清記

沼、菅根山に敵強介を討つ」の中に嘉永七寅正月「忍川ノ流二住ス一盛齋芳直画」が誌されている。この記録から教示されることは、本文挿画は全図芳直画であり、改題本の表紙絵のみが芳幾(天保四年生)画で、岩波版『国書総目録』記載の絵師名歌川芳幾等画は、おそらくこの改題本と同種の資料によつての記載と思われる。しかも、口絵見開き一図の後

の二ウ初めに、内題「箱根靈驗躰仇討」があり、これが初板本の正外題と推定してよいのではないか。そして改印(巳十二)については、安政四年(一八五三)と明治二年(一八六九)とが該当するが、序年記の寅のみならず書末の芳直の面年記があることにしても、また表紙絵の芳幾画をも勘考すると、改題本は明治二年刊の後摺本と断定してほゞ間違いない。

この改題本より前の出版と推定される後摺別題本として『玉櫛筒箱根仇討』(神奈川県立図書館蔵本)なる刊本があるが、これには改印はなく、序末に「嘉永七寅孟陽」があつた。かの改題本にはこの年記の上の部分嘉永七が削り取られていたのである。

その外、東京大学蔵本『玉櫛筒箱根仇討』との表題記載のある上・中・下三冊本もあるが、各冊絵表紙に女人一人が描かれており、板元も「栄久堂」発行記であつた。この板元栄久堂は古く、文政期から、その居所

をかえながらも明治初年に至るまで経営されつづけてきた書肆であり、「明治初期戯作年表」によれば、その最終刊本とも思われるものに、『花雲浅草詣』他一点があった。それ故この東京大学本が初板かどうかは決め難いが、通し丁でありながら、三冊本としての造本よりすれば後摺本と認定して間違いないであろう。

さて、先に挙げた「松若」と後摺本によるこの「仇討」といづれが処女作品となるかの選別の点であるが、共に序文の内容からしては、いづれとも決断することは困難である。

しかし、可能な限り追求の手を進めるならば、後者の初版刊年は画稿の出来あがった嘉永七年正月から彫りの工程に入ったとしても、認可改印は初版では五月以前も可能とみられもする。

しかし「仇討」の初版本未発見の現状では、全く推定の域を出ないが、内容からしても当時の江戸歌舞伎上演には縁遠い本作品が綴られたこと自体、正直いって異常であるし、その上画工の点から比較しても「松若」の二代国貞と、「仇討」の芳直とでは、前者国貞の方が、画工としては上格であるので、処女作品の画工には芳直の方をとるのが適格であるように思われる。それ故、「仇討」の先梓がまづ妥当な考察とみてよいのではないだろうか。

種清誤伝の処女作については、正

しい書誌的考究が種清像確立の要件である。

種清の草双紙について記述される時、必ずと言ってよいほどに、嘉永元年刊として『梅雨濡仲町』が挙げられてきた。柳水亭種清なる戯作者名が、柳下亭種員の門下となる嘉永七年以前には決して用いられていないにも拘らず、そして既に記述したように、絵本番附の狂言作者名の中の彼の初出は嘉永四年と終出は同七年といふことが解っているにも拘らず、柳水亭種清作(嘉永元年刊)の合巻本を記録しているという事実は、何としても不思議といわざるを得ない。

従来研究者は、この自明の矛盾をどう説明するのか。

これは、恐らく従来の研究者が、明治廿九年発刊の朝倉龜三氏編著『新修日本小説年表』をそのまま、索引したか、またそれを承引して作成された昭和四年刊の山崎麓氏編著『日本小説書目年表』を引用して種清の初出作品としたものではないかとしか考えられない。

しかも気になる点は、上記の(仲町)の刊年誤記を岩波書店刊の『国書総目録』がそのまま、継承していることは、書誌研究の余りにも貧困さにおどろかされる。その後昭和五十二年に、ゆまに書房より発刊された『改定年表』でも、一字の訂正も行なわれておらず旧版のまゝである。この誤記の原因はどこから出てき

たのか。この誤伝のプロセスとして考えられる点を追ってみると、おそらく初めに、朝倉龜三編著『新修日本小説年表』が(帝国図書館和漢蔵書目録)によって編纂されそれがそのまま、後の各年表の編者に継承され、嘉永元年(弘化五申春)刊として罷り通ってきたものと思われる。事実、殆んどの諸本が全三篇を通して、改印(辰六)を刻しており、その奥目録にも「安政四丁巳春新鐫目録」として諸草双紙の広告を掲げている萬屋吉蔵版であった。

この記録からしても梅雨濡仲町の出梓は、安政四年新春が通例であり、嘉永元年説は、決定的な誤認といわざるを得ない。

なほ、『歌舞伎年表』によれば、本外題の狂言が、安政三年六月十五日より市村座で上演された。この興行について、この「年表」には左の記述が掲げられている。

当狂言は文政三年三月十八日の芸者、みの吉、殺し一条を仕くみたるもの。同年七月十五日より中村座にて二番目に綴りしを差止に相成、妻、吉、と改め興行せしを、当年三十七回忌に此狂言を出せしは因縁といふべし。

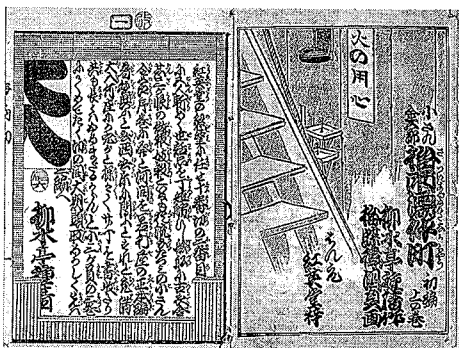
以上の記載からも、窺える通り、『梅雨濡仲町』は、嘉永元年に出梓さるべき筈はないのであって、早く

みて安政三年頃の売り出しが妥当なのではなからうか。

書誌的に疑わしい初期作品についての考察

柳水亭種清の処女作品とされている『箱根靈験仇討』已後の作品群については、前記のように「都鳥汀松若」、「踊形容花競」が、嘉永七年中に出版されているが、彼はその筆力を買われたのであろう、これより後の作品量は大いに増加している。翌安政二年刊としてとり挙げられるものに、先年よりの続編たる『都鳥汀松若』三編、『東海道天日晰』、『旅雀我好話』、『時代加々見』初編、三編、『兎雷也豪傑譚』廿六、廿八編、『亀山敵討』など六点の新作を、岩波版『国書総目録』によって確認し得るのである。

(つづく)



「梅雨濡仲町」柳水亭種清

片岡日記

片岡永左衛門

22

大正十三年十二月

七日 雨

六日 時雨

八時発にて本店ニ至り休業継続否を相談セシニ本日神奈川縣ニ登廳之上決定との事故待居たれたしとなれとも、日々奔走ニ疲労し汽車に乗ハ直ニ眠を催し、一寸座しても眠を催し、夜ハ返て安眠を得ず二三杯の香酒ニ眠り様なれハ挨拶もそこそこにして帰り日没迄支店ニ居り、帰宅。近來始て九時就床。

疲勞ニ起憂ク八時ニ起床出勤し、久々に三時帰宅。親一東京より加奈子見廻りに来り。芳子も来るも平常裡の慰安も得ず。親一五時帰京。黙座しも堪ず九時就床。

八日 昨夜より雨今朝はる

今日田辺輝実氏遺物としてなめし革の手提袋を贈り下る。何力提袋をと思居りし処特ニ悦し

銀行休業も又昨日より二週間となり警察署等に届出。預金者二、三訪問心痛不堪。

晴るかとおれば雲りて此頃の空さためなき我心かな

いたましき心の疲勞れふり立てて、また立いつる我家の門

贈られしかたみの袋 老楽にさけて訪ねん口の形代

途中国汽车にて

預金者五六人來訪。甚々平穩。

常盤なる松の木末ニ冬みへて時雨ニ寒き山の色かな。

十日 雨

昨夜本店より電話にて、七時発にて行く。午後二時帰宅直に出勤、五時帰宅。

月のあかきと思ふまにまた雨の音せしかば

むら時雨まためぐり来て月かけのくもる軒端に雨をきくかな。

枯ふす蓮をみて

十一日 晴

水かれし池に枯ふす蓮葉ハあわれとよそに見るよしもかな。

十三日

午後二時発にて本店行九時帰宅。

十四日 晴

九時発にて本店行。神奈川縣商工課長本店ニ来り種々書類の取調有り。本日藤沢ニ止宿ス。

十五日 晴

預金払戻方法ニ付各支店長招集協議会ヲ了り十時帰宅。

十六日 晴

午前六時発にて藤沢本店ニ立寄各重役ト縣廳ニ行。

木枯ニ木末ハ散りて紅葉の下枝ニ残る色のさやけさ

飼置し心地こそすれなれ来つく なにあさるらむ庭のひよ鳥

十七日 晴

午前町長面会。午後藤沢ニ至り横浜高田ニ止宿。

車中にて

朝なきに煙りなひかし霜白き

野末を遠み汽車のゆくみゆ

十八日

本店ニ立寄午後三時帰宅。日中の在宅近來珍しき事。夜ニ入り尾崎に至りゆるゆるの談話。

十九日 晴

各重役ト縣廳に至り知事ニ面会四時退廳高田ニ至りゆるゆるの談話。過日來此事件ヲ心配し見舞ニ来りしニ

廿一日 晴

縣知事日銀之交渉進ず止不得廿三日より七日間又休業ト決し其指揮ヲナし預金者総代にも面会道徳協會之件ニテ村山氏ニ面会午後二時發にて本店ニ行九時帰宅

廿二日 晴

午前八時半出勤明日迄休業ノ管ニ付預金者模様聞ニ来るも有へしト待構タルニ三四人已にて多八年内開店ハ六ヶ敷ト予想シタルへし。二時平川弁護士ニ面会過日來店ニ慰安に來訪ニ付、岡田氏往訪。冬至ナルモポンプ故障ニテ湯出來ス

藤沢ニ止宿中にて面会ヲ止得サレハ非常ニ心配し居りしニ去ル十七日久々に尋しに大喜ヒ、今夜も一同喜色ありトテ皆喜ぶ。

あたたかき心の添ひて夜の床 ゆめやすらかに今朝ハさめけり

廿日 晴

藤沢ニ立寄 午後十時半帰宅。

廿一日 晴

廿二日 晴

帰途尾崎にて入湯す。

廿三日 晴

本店より昨夜本日招電有りシモ断り一日平臥す。

疲れたるからたを床にうすれたる 冬の夕日を庭に見るかな

常にさへ心ろせはしき年の瀬に 立つ白波の音のはけしき

廿四日 晴

今朝も平臥し居りし二本店より招電ニ付午後ヨリ出發明日知事面会等諸種協議にて国府や二止宿。

廿五日 晴

知事ハ放出意向ニテ久保田氏ニ協議ヲ勧誘ナセニ付又又明日も会議ノ為メ横浜ニ至り止宿。

廿六日 晴夕より雨

十時横浜より本店ニ来りし二昨夜小田原支店員沖津敬之急病にて死去ノ電話あり喫驚休業にて心痛の結果カト特ニ気毒之感ヲ不隠来ル三十日ヨリ五十日休業繼

続ヲ協議し九時帰宅。

廿七日 曇

沖津敬之宅ニ弔慰料六百円其他香料ヲ持參焼香し帰途休業継続ノ件ニテ奔走し午後二時発にて本店二行。九時帰宅。

汽車中にて山の雪を見て様子にはず

山々能いたたき白く今朝見れハ 夜半の時雨や 雪となりけむ

廿八日 晴

九時発にて今日も本店に行七時半帰宅。

山のひた山また山もあらわれて 山おもしろく残る白雪

昨日岡田小三太君より襟巻を歳暮に貰ふ。心入の品を喜びて

贈られし此襟まきの暖かく 冬の寒もよそに勤めむ

廿九日 曇

震災慰問トシテかん詰巻

個配給し来ル震災後十六月目なり。如何ニ手数ヲ要セハトテ笑止千萬也、官僚式ナリ午後二時半発にて藤沢行七時三橋氏日銀より帰着整理二井坂氏ヲ選定セラレし為明日も会議しニ付国府屋ニ止宿。

心してまつらむものを吾妻の 今宵も旅二かりねしてけり。

三十日 夜入り雨

午後十時半帰宅親一昨夜来泊ノ由。

ここかしこかけ免くりつつ行く年も ふくる我世も思はさりけり (排悶の意) 嬉しさにまかせてすき 心願くは うきてうことも ふくる我世も

昨日親一排悶にて大黒ふとふ酒を持參し初秋の頃帽子を贈り来しもよき品なれハ新年よりと仕舞置しに昨日其品を取出し少し重みあれハと自分の冠り来し帽子の軽さと取替行しと聞きも嬉しく

冬なれと春と覚へて嬉

片岡家略譜

片岡家代々永左衛門を名乗る

⑬⑭⑮は(本陣?)何代目かを示す

某女 安政5年8月4日没

政親 ⑬ ⑭ 正樹

ツマ

足柄下郡福浦村 露木富三郎三女

駿東郡三島駅本町 中村九左衛門二女

廿三の弟が中村家へ婿養子

親一 (長男) 共同産蔵働

マツ

尾崎亮司に嫁ぐ

ヨシ (長女) 尾崎亮司に嫁ぐ

トメ (長男) 龍夫

英子 (村井) 長女

亮司 (長男) 示す

左兵衛 明治36.2.26没

妻

龍夫 (長男) 第一銀行常務取締役 共同印刷廠出向

幸子 (長女) 関東大震災で圧死

淳子 (三女) 関東大震災で圧死

カナ (三女) 関東大震災で圧死

泰子 (四女) 関東大震災で圧死

英子 (小平) 紀子 (三女)

亮司 (長男) 示す

左兵衛 明治36.2.26没

妻

しきハ 厚き愛子の心 一寸外出したるも神更より 八手持無沙汰ニ雑誌を取出し一節二節と読ふけるなと 此年来ニ珍妙の静さ。

なりけり

三十一日 曇

七時発にて藤沢二行三時半帰宅も流石ニ今日ハ都を逃出す人の多きか二等車室ハ乗客充満 夜入り関と尾崎に行。夕前より家に居り

暮てゆく年の瀬波の音もなく 明けて静けき 年や迎辺む

(解説 勝俣淳一郎)

片岡家及び尾崎家の略譜

原図・岡部忠夫作成

新刊紹介

◇古文書にみる

小田原の宿
と酒匂川の徒歩渡

A5 一〇〇ページ

自家本

【著者】

石井 啓文

【発行者】

石井 啓文

小田原市東町三三三

☎ 〇四六三三三〇三三〇

【目次】

はじめに

第一章 小田原の起こり

第二章 酒匂川の徒歩渡

第三章 川越のトラブル

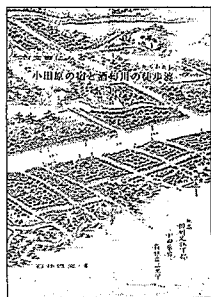
第四章 日記・紀行文に
みる徒歩渡と

小田原宿

小田原宿と

板橋村

筆者は先に『古文書にみる
鴨宮村史』、『古文書にみる
中里村史』、『古文書にみる
山王原・網一色村史』を発



行しており、今回は四冊目
である。いずれも著者自身
の装丁、製本によるがその
腕前は大了なものだ。それ
ゆえに発行部数は少ないが
行間にぎっしり詰めた内容
は充実している。今回その
自説を展開する部分には説
得力あるのも見受けられ
る。

なお、著者は小田原史談会
に加入されており、また、
西さがみ歴史研究会員とし
て郷土史を深く追求される
新進気鋭の学徒である。



◇伊豆史談

通算一二九号

A5 五ページ

伊豆史談会

【発行】

「豆州中嶋郷・宝泉寺」と
は？―永禄六年の「雲板」
銘をめぐる―

木村 博

一遍・真教と伊豆地方の
時宗寺院との関係につい
て

桑畑 和夫

沼津市の城館と関連の小
字名を歩く 土屋比都司

駿東郡深山城跡

土屋比都司

史料紹介 松尾芭蕉と
三島宿 関 守敏

上田史跡見学雑感

入日 明茂

箱根・小田原史跡見学会
・北国街道海野宿と布引温
泉を訪ねて



・伝馬助郷について「お尋
に付お応え書」

土屋 寿山

史料紹介 松尾芭蕉と

三島宿 関 守敏

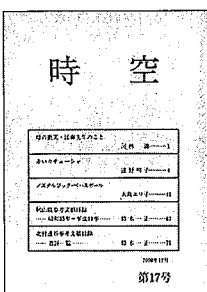
上田史跡見学雑感

入日 明茂

箱根・小田原史跡見学会

・北国街道海野宿と布引温
泉を訪ねて

◇時 空 第一七号



平成十二年十二月一日発行

A5 八四ページ

時空の会

横浜市金沢区谷津町六六一

二〇二 鈴木一正方

【発行】

母と微笑・江藤先生のご
と 河林 満

赤いカチューシャ

遠藤 明子

ノスタルジック・ベース

ボール

大島エリ子

・秋山駿参考文獻目録

「昭和35年」〜平成11年

―書評一覽―

鈴木 一正

小田原市扇町方面を望む

国道二五五号線を隔てて

右手 扇町二丁目

左手 扇町三丁目

鈴木 一正



井細田歩道橋上より '00.12.10 撮影

丹沢の植物

④7

城川四郎きわしろろう

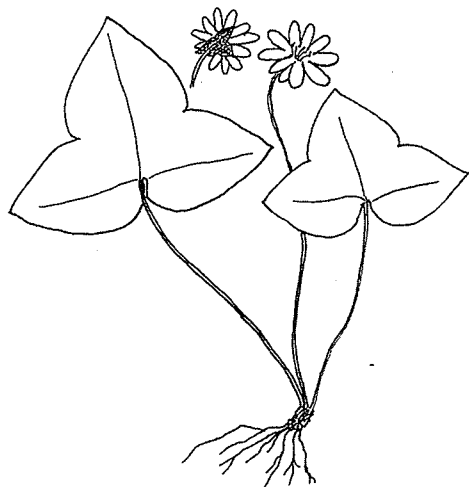
江戸時代には園芸植物として人気があったといわれるミスミソウという植物がある。葉がほぼ三角形の特殊な形をして、冬にも葉が残り、早春には可愛い花を開く。花の色には白色から淡紅色まで変化がある。

この花の花弁のように見えるものは実は萼片で、萼片のように見えるものは実は苞という部分である。

ミスミソウには極めて近縁の仲間が他に三種類あり、それぞれ地域的に住み

ミスミソウ (きんぼうげ科)

Hepatica nobilis
var. *japonica* f. *japonica*



筆者原図

分けているようである。それらのなかで神奈川県には丹沢周辺にミスミソウが分布し、鎌倉周辺にスハマソウが分布する。両者はよく似ているがミスミソウの方が葉の先が鋭く尖る傾向があり、花弁のように見える萼片が細くて、数が多く十枚以上ある。スハマソウは葉の先がやや鈍く、萼片が広く、数が六、七枚である。

以前は葉の形だけを区別点として文献で紹介されていたが葉形は変化が多く、葉形だけでは両者の区別ができない。正確な識別ができるようになって分布を調べてみるとミスミソウは丹沢を東限として西日本に分布し、スハマソウは鎌倉周辺を西限として東北地方に分布することがわかってきた。すなわち相模川を境界として東西に住み分けていることが明らかになった。神奈川県が分布の境界線上にあるというのはいへん興味深い。若い頃、丹沢の尾根のピークでミスミソウを見つけ、そこから流れる沢の下流にも予想どおりミスミソウを見つけたときの感激がなつかしく思い出される。当時、スハマソウとの明らかな区別や分布様式はまだ明らかにされていなかったので丹沢のものと同様のものが同じ種類か別の種類か疑問を抱えたままだった。ごく最近ようやくよく解明されてこのシリーズにも登場させることができ

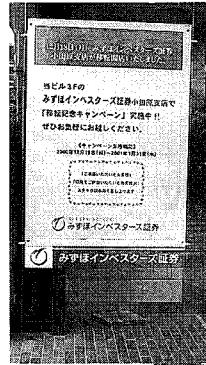
(つづく)



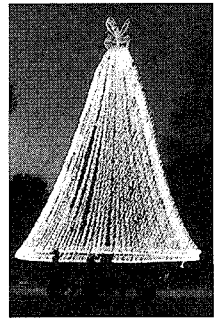


西暦2001年1月1日 小田原城址二の丸にて↑

街
さ
ま
ざ
ま



←新証券会社移転↓



←クリスマス・ツリー
旧三の丸小学校にて



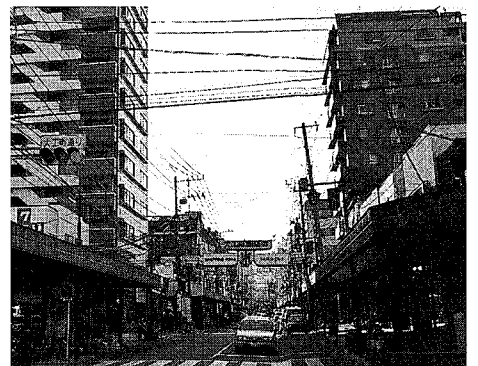
1/1 万葉の湯オープン↑



曾我梅林↓

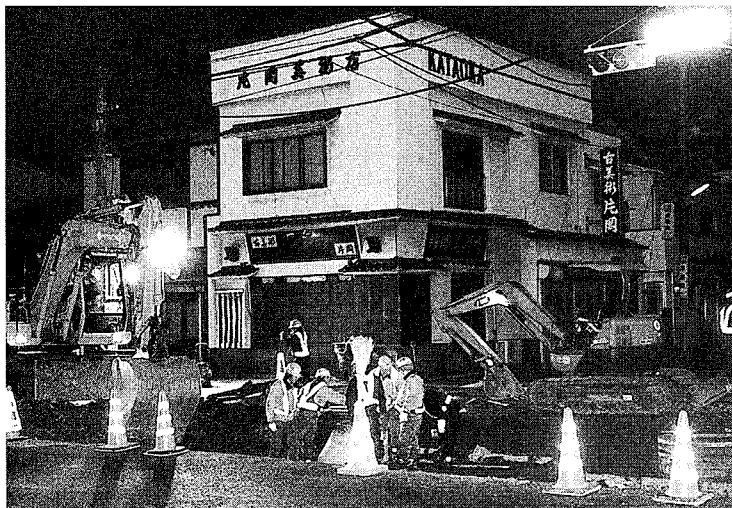


↑閉店 扇町にて



←マンション二つ 大工町通にて

↓国道1号線共同溝埋設夜間工事 箱根口にて



↑城山トンネル開通間近 山角町にて



↑韓国料理ビビンバの進出

小田原史談会行事

お知らせ

卒寿以上の会員
に総集編贈呈

本年一月現在
で九十歳以上に
なられた方々に
総集編第四巻を
贈呈することになりました。

九十歳以上に該当される
のは次の方々です。
市川一郎、柏木一郎、杉
崎正五、富田千春、杉原千
代(敬称略)

以上の方々は、今も小田
原史談会員として大いなる
心情をもって、会の発展を
支えて下さっています。そ
の功労には計り知れないも
のがあり、我々生涯学習を
目指す者にとって良き励み
を与えて下さっておりま
す。

今回その感謝の意を表する
ことになりました。

今後ともご健勝にご活躍
くださるよう祈っておりま
す。

なお、この五名の方々以
外に該当する方がおられま
したら役員迄一報下さい。

地区役員の交代

南町の地区役員の角田道
氏が健康を害され山口廣子
さんと新年度から交代する
ことになりました。

また、飯泉地区の両毛承
子さんは家事繁忙のためこ
の三月から地区役員を辞任
されました。

お二人は昭和六十三年以
来、十六年の永きにわたり
誠心誠意会務を勤めて下さ
いました。誌上をかりて感
謝の意を述べさせて頂いま
す。

原稿の掲載について

紙面の都合により次の稿
は次号以下に掲載致します。

- ・石井富之助 小田原叢談
- ・内田 清 古文書講座
- ・遠藤 次郎 中村原郷
- ・岡部 忠夫
- ・紅蓮洞・坂本易徳
- ・隠岐 威重
- ・露国・日露の役俘虜

のここと

- ・川瀬 速雄 酒匂史談
- ・日下部庄一 源 重之
- ・菅沼 博 私の青春

以上のように載せなくて
ならない分が滞りおつてい
ますが、遠慮なく原稿を役

訃報

松尾 音次郎氏

(まつお・おとじろう) 小
田原市扇町二二八(一三)
昨年十二月十一日逝去
されました。

享年八十九歳

本多 トキエさん

(ほんだ・トキエ) 小田原
市扇町一六(四二)
昨年十二月二十三日逝
去されました。

享年七十四歳

豊住 喜與子さん

(とよすみ・きよこ) 小田
原市東町四一(一七)
昨年十二月二十三日逝
去されました。

享年八十四歳

西郷 富子さん

(さいこう・とみこ) 小田
原市鴨宮三三(三)
去る二月四日逝去され
ました。

享年八十一歳

瀬戸 長治氏

(せと・ちやうじ) 小田原
市酒匂五五(一四)
去る一月五日逝去され
ました。

享年七十四歳

河村 勝氏

(かわむら・かつ) 元民社
党代議士、同党県連会長
小田原市南町三一(九一)
三)
去る一月三十日逝去さ
れました。

享年八十五歳

沖山 敏子さん

(おきやま・としこ) 元史
談会事務局長 小田原市南
町二二(三二)
去る二月六日逝去され
ました。

享年九十二歳

曾我 操氏

(そが・みさお) 賛助会員・
小田原報徳自動車(株)取締役
会長 小田原市浜町一(六
一八)
去る三月十三日逝去さ
れました。

享年七十一歳

謹んでご冥福をお祈りい
たします。

員またはアオキ画廊までお
届けください。必ず掲載致
します。内容はどのような
分野でも差し支えありませ
ん。

初詣

熱田神宮・徳川美術館

【日時】一月十八日(木)

七時 小田原駅前出発

【行程】駅前 東名足柄SA

岡崎IC 国道23号 熱田

神宮参拝・同宝物館見学 東山ガーデン(昼食) 徳川美術館 岡崎IC 東名牧ノ原SA 小田原駅前十八時五十五分帰着

【費用】七千三百円

【参加者】向山重忠、勝俣

淳一郎、岡部忠夫、吉池清、

山口一夫、曾我保夫、形岡

タミ子、加藤松江、田島マ

サエ、遠藤茂子、安藤繁美、

峯三、額田好男、恒子、鈴

木孝、杉山嘉榮、木曾正雄、シゲ、早野廣司、尊子、中野恒郎、文子、高田ヒデ、河合多美子、湯川玲子、山口美智子、剣持芳江、山口廣子、劍持公一、和子、小室泰子、三尋木啓子、本多チエ、秋本央、江口とも子、早野光子、小林房子、木村礼子、本多孝三、杉本剛氣、三橋国雄、ふさ子、小野意雄、和田治助、相原俊夫、佐知子。以上四十六名

(敬称略・順不同)

特別賛助会員

智恵袋 相田酒造店

小田原銀座 アオキ画廊

熱海 アオキクリニック

飛多屋

紳士服のアメリカヤ

(株) アルファ

伝統工芸 石川漆器(株)

税理士 石原和夫事務所

伊勢治書店

伊豆箱根トラベル 営業所

画材 ガクブチ ヲウエ

自動車修理 板金塗装 I-3マン

かまぼこ

株式会社 小田原魚市場

小田原ガス

小田原市農業協同組合

小田原報徳自動車

株式会社 オートセンター・スギヤマ

オリエント座

かまぼこ籠 清

カネボウ株式会社小田原工場

神尾食品工業 製

木地挽 日下部産業 製

かみやま小児科クリニック

興電社

小伊勢屋

国府津館

(有)小松石材店

さがみ信用金庫

趣味のこぶく さくらい

箱根湯本温泉 雀のお宿 正栄堂 春光荘

小田原 秀考のかまぼこ

辰寿堂スポーツ

大宮不動産

邦とうどん 小田原城趾前 田毎

綱元直営 ぶるほ

そびそ二宮

茶半家具株式会社

ちんぎょう本店

角田カクフ子店

東京電力(株)小田原営業所

株式会社 東華軒

ト一ホ一建物 齧

鳥かつ樓

和菓子 菜の花

八小堂書店

八子マサ

平井書店

株式会社 報徳

建築金物 家庭金物 (株)星崎仲吉商店

本多時計店

松坂屋

学生専科 丸マルク

諸星運輸グループ

曾我の榊子 遊幸・かまぼこ 美の政

みみづく幼稚園

ヤオマサ株式会社

錦通り 山口菓子舗

防災器具 優光社

総会のお知らせ

日時 4月21日(土)午後1時30分

会場 小田原図書館

平成12年度事業・決算報告

平成13年度事業計画(案)

同 予算案 その他

講演 二宮尊徳の生涯

一 小田原に関する事柄を中心に

講師 斎藤清一郎氏

(報徳博物館館長代理)

多数の方の参加をお待ちしております

平成13年度史跡めぐり(案)

5月17日(木)

主な見学場所 岩瀬氏邸、春光院、

天神社、浅間神社、道祖神、

萬福寺他

集合場所 鴨宮駅北口 8時50分

講師 星崎茂氏

弁当ご持参、歩きやすい服装で

参加ください

6月8日(金)

松田、大井、秦野方面

主な見学場所 寒田神社、最明寺、

波田野城址、実朝首塚ほか

会費 3,000円

受付 6月1日(金)9時

伊豆箱根トラベル

昼食ご用意ください

9月18日(火)

八王子方面

11月8日(木)~9日(金)

足助、岩村、明智方面

1月19日(土)

東京方面

小田原史談(年四回発行)

年会費 普通会員三千円
011-0316-4131